

目次

発刊にあたって	iii
第1巻まえがき	vii
① 英語音声の習得	
—プロソディーの重要性—	1
上田 功	
② 幼児の言い間違いと言語産出モデル	
—音韻部門の発達と連続性—	23
寺尾 康	
③ 可算・不可算の区別の習得	
—個別化の観点から—	43
小川睦美	
④ 3単現 -s の習得	
—人称素性と数素性の影響—	65
須田孝司	
⑤ 前置詞の習得	
—前置詞とその前後の要素の関係性—	85
吉田智佳	
⑥ 英語の使役事象の習得	
—Why not “The window broke with a stone” ?—	107
平川真規子	

- 7 **Be 動詞の過剰生成の原因** 127
大滝宏一
- 8 **自動詞の過剰受動態化の原因**..... 147
近藤隆子
- 9 **自動詞文での be + 過去分詞の原因**
—学習者の文法はきめ細やか— 167
若林茂則
- 10 **英語文法項目別の習得困難度**
—大学生を対象とした予備調査— 187
白畑知彦・横田秀樹

1

英語音声の習得

—プロソディーの重要性—

上田 功

1. はじめに

成人が外国語・第二言語を習得する場合、発音には必ず母語の訛りが現れ、学習者はこれを克服しながら目標外国語の音声体系を習得するという過程を辿る。本章ではこのプロセスについて、日本語を母語とする学習者の英語習得という、われわれの最も卑近なケースについて、特に母音や子音などのいわゆる単音ではなく、強勢やイントネーション等の、プロソディーと呼ばれる側面にフォーカスを当てて考察する。

2. なぜプロソディーなのか

2.1 プロソディーの軽視

世間の英語教育に対する関心は高く、会話が重視される現在、多くの発音教育の入門書や解説書が出版されている。大きな書店に行くと、これらは「外国語」コーナーの一角を占めて、多くの書籍が堆く積み上げられている。これらの多くは、英語の母音や子音などの解説や練習に多くのページが割かれ、いわゆるアクセントやイントネーションなどは、相対的に軽く触れるにとどまっているものが多い。今、母音、子音など、いわゆる単音を分節音と呼ぼう。そして分節音が複数連続して生ずる現象、例えば強弱のアクセントや高低のイントネーション、そしてそれらが作り出す英語のリズム等を、プロソディーと呼んでおく。

読者はこれまでどのような発音教育を受けてこられたであろうか？おそらく、余程の専門家を除いては、英語のプロソディーについて、体系的な教育を

幼児の言い間違いと言語産出モデル

—音韻部門の発達と連続性—

寺尾 康

1. はじめに

間違いという窓から言語の諸側面を観察することは興味深い。ただ本章でいう「間違い」は、Corder (1973) の用語によると、学習者に体系的に現れる error ではなく、日常の言語活動に現れる突発的で非体系的な間違い、lapse である。ただし、この分類には明確な線引きが難しい領域も存在する。例えば、第一言語習得中の幼児に観察される error と lapse の境界がそれにあたる。

本章では、あえて、この領域に生じた lapse と思しき誤り、幼児の音韻的／音声的言い間違いに注目する。それらを、これまで分析の蓄積がある(寺尾(2002)等)成人の言い間違いと比較して、そこから、私たちの意図が調音に換えられる過程を解明しようとする言語産出モデルの構築に向けて何が言えるのかについて考察していく。まず、誤りのレベル、タイプから見た全体的な傾向を調べ、言語産出過程の連続性(幼児には幼児のモデルが、成人には成人のモデルが必要なのか、あるいは一つの基本モデルですむのか)について確認を行う。続いて音韻代用型、音韻交換型というタイプの違いに焦点を合わせ、より詳細な分析を試みる¹。

1 成人の言い間違いと幼児の言い間違いを比較した研究はこれまで寺尾(1993)、Terao(2008)があるが、今回の分析は対象となる実例数、観点の数とも大幅に改善されている。

可算・不可算の区別の習得

—個別化の観点から—

小川睦美

1. はじめに

英語学習者にとっての可算名詞と不可算名詞の区別の難しさは、(1) のような例文に現れている。

(1) a. This house is built of *brick*.

この家は煉瓦で造られている。

b. He used *bricks* to build the house.

彼はその家を建てるのに煉瓦を使った。

c. The house had *a brick* of a different colour.

その家には異なる色の煉瓦が一つあった。

つまり同じ煉瓦造りの家を見ている、*brick* という単語は不可算名詞と可算名詞(単数・複数)の両方として使用できるのである。英語には文脈によって可算・不可算両方の解釈ができる名詞(以後フレキシブル名詞と呼ぶ)が多数ある。学習者にとって困難なのは、そのような名詞のフレキシブルな側面を学習すること、それぞれの言語形式の意味を正しく理解すること、そして産出時に自分の意図する内容を正しい言語形式で表すことだと言えるだろう。特に、(1a)と(1b)の日本語訳において*brick/bricks*の両方が単なる「煉瓦」と訳されていることからわかるように、日本人英語学習者にとっては母語(L1)である日本語の文法において名詞の数表記が必須ではないため、可算・不可算の意味の違いを理解することや義務的に表記することは難

3 単現 -s の習得

—人称素性と数素性の影響—

須田孝司

1. はじめに

日本人英語学習者 (JLE) にとってなかなか身につかない文法規則の 1 つに 3 単現 -s がある。文の時制が現在であり、主語名詞句が 3 人称単数の場合、動詞に屈折形態素として -s/es がつくという主語と動詞の一致に関わる規則である¹。本章では、生成文法理論をもとに 3 単現 -s が作り出される過程を説明した上で、中学生と大学生を対象に行った文法性判断実験を紹介する。そして、JLE が 3 単現 -s の過剰使用 (1a) や脱落 (1b) のある英文の文法性を判断する際、どのような要素が影響を与えているか議論する²。

- (1) a. < -s の過剰使用 > *Children plays video games every day.
 b. < -s の脱落 > *The boy play soccer after school.

2. 3 単現 -s の仕組みと日本語の派生

2.1 名詞句の数と人称の素性

生成文法理論では、主語と動詞の一致には主語名詞句の人称と数の形式素性が重要であり、3 単現 -s は文を作り出す過程で動詞に与えられた人称と数の形式素性が表出したものであると考えている³。形式素性とは文を作るため

1 形態素などの用語については白畑・富田・村野井・若林 (2019) などを参照のこと。

2 * はその文が非文法的であるということを示している。これ以降も同様である。

3 形式素性については Radford (2016) などを参照のこと。

前置詞の習得

—前置詞とその前後の要素の関係性—

吉田智佳

1. はじめに

英語では *at midnight, in the evening, on June 10th* のように *at/in/on* が使い分けられるが、このような類似した意味を持つ前置詞の使い分けが英語学習者には難しい。ここでは前置詞の選択を誤る原因について考える。まず、前置詞が複数の意味素性からなる集合体であり、前置詞の意味の違いは値を持った意味素性の組み合わせの違いであると仮定することから始めたい。

2. 理論的背景

2.1 前置詞を構成する意味素性

単語の意味は同じ意味領域内の他の単語との関係性によって決まる¹。ある単語を完全に理解することは類似した意味を持つ単語との境界を見つけることに他ならない。たとえば、「タクシー」「トラック」「バス」という名詞はいずれも乗り物であり、[+乗り物]という意味素性を共有している。一方、「人を運ぶ」か「人を運ばない」のか、「予定に合わせて走る」か「予定に合わせて走らずに走る」のかという点で異なり、これらの単語の違いは表1のように示される²。

1 意味領域とは互いに関連する意味を持った単語が属するグループをいう。同じ意味領域に含まれる単語は共通の意味素性を持つ。

2 影山・de Chene・日比谷・Tatsuki (2020) 他を参照。「+」は当該の意味素性を持つことを示し、「-」はその意味素性を持たないことを示している。

英語の使役事象の習得

—Why not “The window broke with a stone” ?—

平川眞規子

1. はじめに

第二言語(L2)習得研究では、動詞の項構造¹の習得の点から多くの研究が行われてきた²。本章では、これまでの研究成果を基に、新たな視点から日本語を母語とする英語学習者による「使役事象(Causing Event)」の習得を探ることにしたい。具体的には、(1)～(3)にあるように、自動詞と下線部の前置詞句が表す「使役事象」が同一文で共起できるか否か、日英語における共起性の違いに着目する³。

- (1) a. The door opened by itself.
 b. ドアがひとりでに開いた。
- (2) a. *The door opened by the wind.
 b. ドアが風で開いた。
- (3) a. *The door opened with this key.
 b. ドアがこの鍵で開いた。

例文中の「opened・開いた」は自動詞として用いられている。自動詞は、例えば「ドアが開く」という出来事を引き起こす「使役主(Causer)」が想定されない場合に用いられるのが一般的である。したがって、出来事の様態を

1 項構造については2節参照。大津・今西・池内・水光監修(2022)第7章なども参考になる。

2 Hirakawa(2003), 近藤(2019), 白畑(2015), 白畑他(2020), Yip(1995)など。

3 例文に付く*は、文が非文法的(非文)であること、✓は文法的(正文)であることを示す。

Be 動詞の過剰生成の原因

大滝宏一

1. はじめに

Be 動詞は英語学習の最初期に学ぶ文法項目の一つであり、英語学習者にとって学ぶことが容易な文法項目であると認識されている。例えば、2014年に文部科学省が発表した新設大学の設置計画履行状況等調査では、ある大学において必修英語科目で *be* 動詞の使い方などを教える授業が行われている状況に対して、大学教育に相応しい水準の授業と適切な入学者選抜が行われるように改善すべきであると求めている。このような例からも、*be* 動詞の習得は大学教育のレベルで扱われるべきではないと考えられるほど容易なものであると認識されていることが分かるが、本当に *be* 動詞の習得は一般的に認識されているように単純で容易なものなのであろうか。

本章では、英語学習者の中で観察される「*be* 動詞の過剰生成」と呼ばれる誤りを言語理論の観点から分析することによって、日本語を母語とする英語学習者がどのような言語知識のもとで *be* 動詞を使用しているのかを考察する。*Be* 動詞の過剰生成とは、以下の (1) に示されるような *be* 動詞と一般動詞を共起させる誤りである。

- (1) John is play tennis.¹

1 この誤りのターゲット文は、本来三単現の *-s* が使用される (i) の文である可能性と、現在進行形が含まれる (ii) の文である可能性があるが、学習者は現在進行形を通常伴わない状態動詞 (*know* や *have*) が使用される場合においても *be* 動詞を過剰生成するため、(ii) の文がターゲット文である可能性は低いと考えられる (後述の Ionin & Wexler, 2002 を参照)。

(i) John plays tennis.

(ii) John is playing tennis.

自動詞の過剰受動態化の原因

近藤隆子

1. はじめに

英語を第二言語として学ぶ学習者がよくする誤りに、自動詞の受動態過剰一般化¹がある。自動詞は本来「主語＋動詞」の構造を取り、目的語を取らないため、受身文にすることはできない。しかし、英語学習者は、(1)のように自動詞に誤って受身文を適用してしまうことがある²。

- (1) a. *³What was *happened* this morning?
 (正しい文：What *happened* this morning?)
 b. *Many soldiers were *died* in the war.
 (正しい文：Many soldiers *died* in the war.)

言語を習得する際、学習者にとって重要な課題の1つは、当該言語において、動詞がどのような構造を取るのかを理解することである。本章では、英語を第二言語として学ぶ学習者が、自動詞、より具体的には非対格動詞の習得過程で、受動態の過剰一般化の誤りをおかす傾向にあるという研究報告、および、その原因に関する主な仮説を紹介した上で、受動態の過剰一般化の原因としては、あまり調査されていない主語名詞句の有生性の影響に関する仮説を実証的に検証し、英語学習者による非対格動詞の習得について議論する。

1 目標言語のある規則をその規則の適用範囲外の項目にまで当てはめてしまうことにより起こる誤用のこと。過剰一般化ともいう(白畑他, 2019)。

2 Balcom (1997), Hirakawa (1995, 2003), Oshita (1997, 2000), Yip (1995), Zobl (1989) 他

3 言語学では、文の先頭にアスタリスク(星印*)を付けて、その文が非文法的であることを示す。

自動詞文での be + 過去分詞の原因

—学習者の文法はきめ細やか—

若林茂則

1. はじめに

本章では、第二言語学習者によって産出される (1) のような be + 過去分詞の形が、どのような文法知識にもとづいているかを論じ、母語話者の言語使用に照らすと「誤り」である学習者の言語使用が、人間の言語知識の意味要素にもとづくきめ細やかな規則の現れであることを示す¹。

- (1) a. Most of people are fallen in love and marry with somebody.
 b. The most memorable experience of my life was happened 15 years ago.
 (いずれも Zobl, 1989, p. 204 より引用)

以下、2節では (1) の are fallen や was happened のような be + 過去分詞を扱った先行研究を取り上げる。3節では英語母語話者の文法における自動詞文を意味単位から分析し、その分析にもとづいて4節では学習者の文法知識に関して新しい説明を提案する。5節では、まとめを述べる。

2. 第二言語学習者が be + 過去分詞を産出・容認する理由

上の (1a) の are fallen は、なぜ産出されたのか。fall は自動詞であり、このような be + 過去分詞の形でインプットに現れることはなく、学習者が記憶にもとづいて産出することはありえない。この形は、学習者の文法知識が、見たことも聞いたこともない新たな文を作り出す「生産性」を持つこと

1 様々な母語を持つ第二言語話者がこの形を産出する (Oshita, 2000 など)。

英語文法項目別の習得困難度

—大学生を対象とした予備調査—

白畑知彦・横田秀樹

1. はじめに

本章では、日本語を母語とする大学生 236 名に協力いただき、文法性判断テスト (grammaticality judgment test : GJT) を使用して収集した、英語の文法項目別習得困難度順序の調査結果を紹介する。題名に「予備調査」と副題を加えたのは、今回の報告は、研究の第一段階の報告であり、調査自体は途に就いたばかりであるからだ。今回の調査結果と、そこから明らかになった問題点を基に、使用した調査方法等をさらに適切な方向に修正し、さらに大規模に、かつ詳細に、日本語を母語とする英語学習者 (Japanese Learners of English : JLEs) の習得困難度順序を解明しようと考えている。

英語を教えていると、どの英文法項目も同程度に学習困難ではないことが経験的に分かる。たとえば、JLEs は冠詞や名詞の複数形などの習得が困難であると先行研究にも書かれているし、実際に、冠詞を脱落させたり、複数形の -s を付加しなかったりする誤りを目にする。また、語順は正しいのであるが、Today is busy. のような英文も産出されることに気づく。他にも様々な種類の誤りがあることに気づかされる。それでは一体、どの文法項目が習得困難で、どの項目が容易なのか。この問いに対する明確な答えが欲しい。

第二言語 (L2) を習得する過程で、学習者に共通する習得困難度順序が存在すると言われている。Krashen (1985) は、それまでに行われてきた、L2 としての英語の文法形態素習得の調査結果を整理し、図 1 に示す順序を提案した。右に行くほど習得困難度が高くなるとした。そして、この順序は、どの L2 話者にも共通する困難度順序であるとも主張した。